

巻頭言

本質を見極めた技術開発

Technical development with the essence clarified

取締役執行役員常務

小川 尚

Takashi OGAWA



私が入社したのは、エンジン制御にマイコンが本格採用され始めた時期である。当時の車載マイコンの能力は 8bit・ROM:4kbyte・RAM:192byte・クロック:1MHz であり、マイコンはエンジン制御以外にはほとんど採用されていなかった。

以来 35 年余り、エンジン制御用マイコンの処理能力は当時の約 1000 倍になり、クルマのほぼ全ての機能・性能はエレキ（エレクトロニクス）によって飛躍的に向上し、エレキシステム自体も大規模化・複雑化・高速化された。

最近よく言われる 100 年に一度の大変革、「自ら保有し・自ら運転する、移動および自己主張の手段」というクルマの定義すら変えるこの変化もエレキのちからなしには実現し得ない。エレキは、クルマの機能・性能向上手段にとどまらず、新たな付加価値創造の主役へと役割・位置付け・存在意義を圧倒的に拡大している。

しかし、その一方で、従来のように具体的に必要な機能が明確に提示されているわけではない。お客様自身（自動車メーカーやエンドユーザなど）にも何が必要なのか見えにくい状況にある。これからの技術開発は「どう実現するか」の前に、まず「何を実現するか」を決定することから始めなければならなくなった。

さらに、クルマに応用されるエレキ技術は拡大を続けている。これに伴い、新規企業の参入、グローバル化、ビジネスモデルの変化、開発プロセスの変化が起こっている。

この結果として、「将来の予想が困難になった」・「競争が激しくなった」・「技術だけですべてが解決、完成できるわけではなくなった」。また、突然現われた別領域の技術が、従来のカーエレキ技術とその延長線上の技術を凌駕する、あるいは全く無意味にして取って代わる、といったことも起こり得る。

このような環境下において、真に有益な技術開発を効率的に進めるには、コネクティッド・自動運転・電動化・AI・ビッグデータなどの魅力的なコトバに惑わされることなく、冷静に本質を見極め、目的を意識することが従来以上に重要に

なる。こうすることにより、自身の開発の位置付け、目標が明確になり、ブレることのない開発が可能になる。

さらに言えば、これからの技術開発には以前にも増して技術力のみならず、多くのエンジニアの能力をまとめる人間性、将来を見通す洞察力、技術をお客様の要求に合わせて商品化する企画力といった総合力が必要になる。

技術バカではない、幅広い視野をベースとする高い技術力と困難に対してもあきらめない情熱をテングループの技術者に期待し育成すると共に、これを結集し、100年に一度の大変革を実現する開発に取り組んで行きたい。

小嶋